

月曜寸言

中国の政治の動きは、つねに複雑かつ流動的であるだけに、その将来を予測することは難しい。だが、論理的に考えればこうなるだろうということは可能であり、中国研究に携わる者としては、そのような蓋然性を探索する義務があるのかもしれない。

私は、周恩来の死の直後に多くの場所で発言を求められたとき、毛以後への時間が切迫している中国においては、当面、政治の激変を避けようとする拘束力が働くのではないかとみなし「批林批孔」運動や「水滸伝」

批判がそうであったように、党内の深刻な路線闘争は今後も継続するであろうが、いずれも不透明なあいまいさのうちに終結するのではないかと述べた。

そのような矢先の「走資派」批判であっただけに、二、三の編纂者は早速、私に電話をかけた

考えたのは、「走資派」の立場こそ、中国の当面の社会的・国家的要請に合致しているがゆえに、彼らはたとえ激しく批判にさらされようとも、時は彼らに

利するし、潜在的には広範な支持基盤をもっているのではないかとみなしたからにはほかならな

か。それにしても、周恩来の葬儀がおわるとすぐ「走資派」批判がわきあがった謎は奈辺にあるのか。たとえば、邦語で出てい

周恩来批判の影

中嶋信雄

てきて鄧小平失脚、中国の大混乱という見方を告げ、暗に私の見方が甘かったのではないかと

いってような口ぶりであった。いづれも親しい編纂者だったの

で、私としてもいささかつらかったが、まだ鄧小平の失脚を語るのは早計だと、抵抗した

次第である。私がそのように

い。ここにこそ遊に、文革派の危機意識が存在するのである。

果たして、その後の情勢を見ていると、「走資派」批判の動きは毛沢東の新しい詞の方を大見出しで開りこんでいる。この辺

の問題は、周恩来を哀悼して全

る「人民中国」の四月号は、周恩来追悼号のほすなのに表紙には毛沢東の新しい詞の方を大見出しで開りこんでいる。この辺の批判も他方では存在するのである。

き、毛以後への時間が切迫している中国においては、当面、政治の激変を避けようとする拘束力が働くのではないかとみなし「批林批孔」運動や「水滸伝」

次第である。私がそのように

の特定の部署以外にはなかなか拡大せず、鄧小平らの失脚もまだ伝えられていない。今日の文

から撤去されたこと、「人民日報」ほかの公式紙誌が周恩来追悼の論文や周恩来の業績を回顧した記事などをそれ以後掲載していないことともに、事態の本質に迫る力ギの一つではなからうか。今回の一連の事態のなかには、圧倒的多数の鄧小平批判のなかに、一方では周恩来批判、他方では江青批判の最新聞があったと伝えられたが、この